

(2012年度山西大学奨学生レポート3月)

## 山西商人を知っていますか

後藤千恵

太原の3月はまだ寒さが抜けないものの、だんだんと暖かくなり、少しずつ春が近付いているように感じられます。山西大学での留学期間も残り3カ月余りとなり、また、春節休みも終わり新学期に入ったこともあって、気持ちを新たに中国語の学習はもとより、中国文化により多く触れるということも積極的に行っていきたいと思えます。

今月のレポートは、太原市内の「晋商博物館」で見えてきたものをレポートさせていただきます。

2月、运城へ旅行へ行った際に、山西省を拠点として活動していた山西商人について興味がわいたので、太原市内の「晋商博物館」に行ってきました。「晋商」とは山西商人のことで、明代に山西省が「晋」という名であったことからそう呼ばれます。晋商博物館は太原の中心部に近い公園内にあり、無料で開放されている上、休日に行ったこともあって、多くの方が参観に来ていました。

山西商人を知っていますか？山西商人とは明代から清代にかけて活躍した商人集団の総称です。元々は塩の販売で各地を回り、売り先の特産物などを買い、またそれを別の土地で売るということで利益をあげていました。そして、様々な土地に取引の拠点を設けるまでに発展したこともあり、清代中ごろから現金を持ち運ぶ不便さや危険性から為替の取扱いを中心とした金融システムを用いて、さらにその商業規模をなんと北はモスクワ、南は福建省まで広げていったようです。中国各地の支店は山西商人だけでなく、民間人、また政府の預金や税の管理にも使われており、金融業の面でも成功していました。この博物館には、山西商人の歴史や取引についての分かりやすい解説だけでなく、展示物の中には為替手形や各地に作られた支店とやり取りをした手紙もありましたし、現在のモンゴルやロシアにあたる地域と取引をするためのモンゴル語、ロシア語の辞書も展示されており、山西商人の商業範囲の広さとその規模がよく分かるとても興味深い展示でした。

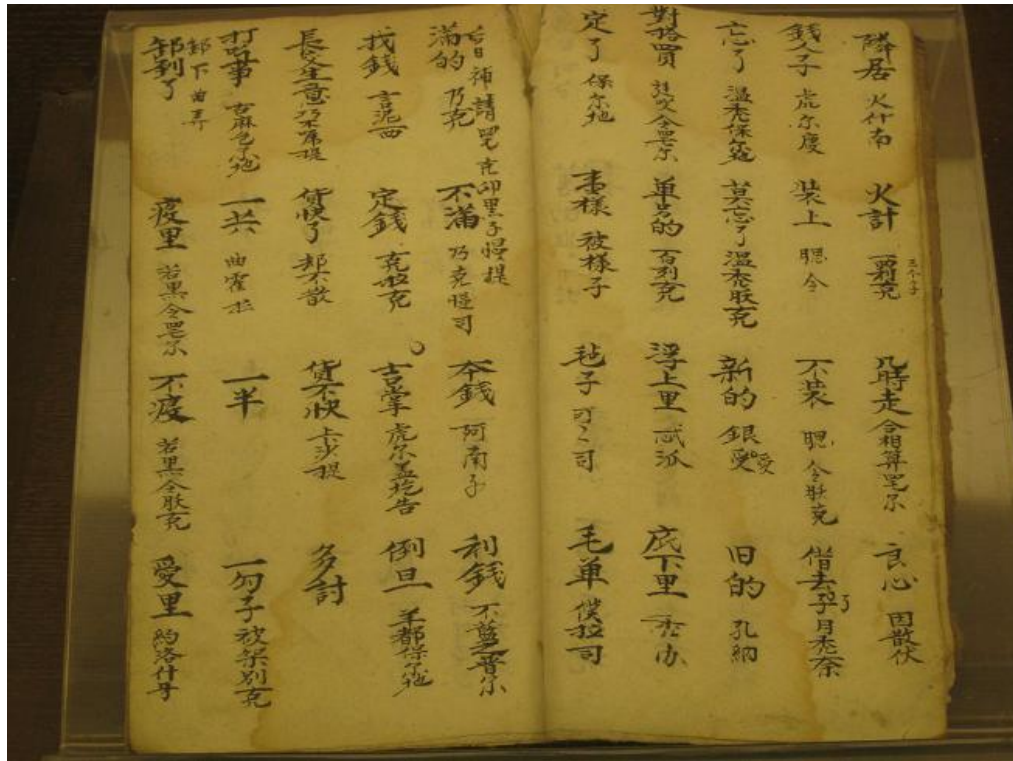
山西商人の勢いは清代末頃よりだんだんと衰えていきましたが、現在でも「山西商人」というと、頭の回転が速く、優秀な商売人と

ということがイメージされるようです。実際に、言葉の違う地域にも積極的に進出していますし、為替システムについても広範囲で運用できるだけの設備や商人組織のまとまりを保ちながら金融業の面でも発展させています。山西商人が成功した理由には地の利があったということもありますが、時勢の変化に柔軟に対応し、それぞれが自身の能力を高めつつ、集団としてのメリットを大いに利用したということがあるのではないかと思います。

今回は山西商人についてレポートさせていただきましたが、山西省の歴史や文化について、私自身今まで知らなかったことの方が多く興味深く感じるので、今後も紹介していきたいと思います。



晋商博物館の中です。奥の建物の中が展示室になっています。



中国語とモンゴル語の辞書です。太く、大きな字で書かれているものが中国語、小さな字が音で表されたモンゴル語です。「新しい」「古い」「忘れた」から「元金」「利子」まで、今でいうところの“ビジネス”モンゴル語が書かれています。